



総指揮官と私の事情 2

夏目みや

Miya Natsume

Regina



RB

レジーナ文庫

▼ アルピラ

気の強い、
おませな貴族令嬢。
ケイトと仲が良い。

▲ レスター

アリオスを慕う副官。
童顔の子犬属性で、
かなりの苦勞性。

エディアルド ▲

超美形な、アリオスの兄。
弟を溺愛するあまり、
過剰な愛情表現を取る。

リース ▲

ある日、食堂にやって来た、
強面で厳つい男性。
久しぶりにこの街に
戻ってきたらしいが……

マルセル ▲

道端で倒れていたところを、
ケイトに助けられた少年。
ケイトのことを気に入り、
食堂に通うようになる。

▲ 恵都(ケイト)

突然、異世界にトリップした
20歳の女の子。
アリオスの屋敷で面倒を
みてもらいながら、食堂で働く。

▲ アリオス・
ランバートン

23歳という若さで、騎士団の
総指揮官を務める超美形。
いつも無表情で、
冷静沈着な態度を崩さない。

目次

総指揮官と私の事情 2

7

番外編 総指揮官は心配症

309

書き下ろし番外編 兄心と弟心

355

総指揮官と私の事情 2

1 総指揮官と仕事の事情

私の名前は恵都^{ケイト}。名前からわかるとおり、生粋^{きんすい}の日本人だ。歳は二十歳。ある日道を歩いていたら、いきなり足下にできたブラックホールに引きずりこまれてしまった。たどり着いた先は、なんと異世界でした。

そんな私を拾ってくれて、衣食住だけでなく至れりつくせり面倒を見てくれてる人の名は、アリオス・ランバートン。二十三歳という若さで騎士団の総指揮官を務めている、すごいお人だった。

しかも総指揮官殿は、色素の薄い茶色の髪に青色の切れ長の瞳を持つ、とんでもない美形。

迷い込んだ庭で初めて出会った時、彼は雨に全身を叩かれながら泣きじゃくる私を、自分の屋敷へと連れて行ってくれた。

出会った最初は正直怖くて、びくびくしていた。だって無表情だから何を考えている

のか、全然わからなかったんですもの！

会話をして交流を深めようと試みても、返ってくるのは必要最低限の言葉なので、会話のキャッチボールなんてできない。いつも話しているのは私だけで、彼はずっと黙っている。

きっと私のおしゃべりが迷惑なのだろうと思っていたが、途中から吹っ切れた。だって、話さないとストレスがたまるもの。誰のストレス？ もちろん私の！！

そうして、聞いているのか、いないのかわからない総指揮官殿相手に、一方的に話し続ける日々が続いたある日のこと。いつまでもお世話になってはいけないと、私は自立を試みた。

働き先の食堂を見つけて、住み込みで働くことに決め、総指揮官殿が公務で留守にしている間に、内緒で決行したのだ。

一カ月ほど経ってから、改めてお礼を言うつもりで総指揮官殿を訪ねたら、そのまま帰してもらえず、屋敷から食堂に通うことになった。

その行き帰りは送迎付き。時には過保護だと感じるぐらい、総指揮官殿は私に甘い。

総指揮官殿の迷惑かと思って自立を試みたけど、そうではなかったみたい。側にいるにつれて、わかったのだ。

いつも無表情な総指揮官殿は、本当は温かい心の持ち主だということが。毎日私の好きなスイーツをおみやげに買ってきてくれたり、私が寂しくないようにと、子猫のマールをもらってきてくれたりもした。

それに歩く時は必ず私に歩道側を歩かせるし、重い荷物は持たせない。優しい総指揮官殿にだんだん惹かれていったのは、当然のことだと思う。

そんな彼と晴れて両思いになった。相変わらず口数は少ないけれど、たまに見せる微笑たる表情の変化に、私はドキドキしっぱなしだ。

過剰なまでに総指揮官殿を可愛がる兄、エディアルド——兄上殿や、子犬属性で総指揮官殿の忠実なる側近のレスター、総指揮官殿のことが大好きな八歳のアルビラなど、彼の周りには不思議と人が集まって来る。もちろん私もその一人。

これからも総指揮官殿の側において、もつといろいろな表情を見てみたいなんて、密かに思っていたりする。

総指揮官殿は毎朝いつも同じ時間に起きる。

そして、食卓について紅茶を飲みながら、難しそうな書類を片手に、私が起きて来るのを待っているのだ。私はつい寝坊して、慌てて席につくことが多い。

「お、おはようございます、総指揮官殿」

私が席につくとそれを合図に食事が運ばれてくる。そうやって出かけるまでの時間を共に過ごしているのだ。

私が仕事の時は一緒に屋敷を出て、私を食堂に送り届けてから、ご自分の職場へと向かう。

私は今日休みなので、総指揮官殿を玄関でお見送りするのだ。

いつの間にか足下にすり寄って来ていたマールを抱きかかえて、総指揮官殿の顔を見る。

「お気をつけて、総指揮官殿」

笑顔で手を振ると、総指揮官殿は一度だけうなずいてから出かけて行った。

その後ろ姿が見えなくなるまで見送った後、私は手を叩いて叫んだ。

「よし、私も準備を開始しますか!」

今日は久々のお出かけなのだ。うふふ。

どこに出かけるかって? それを説明するには、数日前までさかのぼらなければなら
ない——

「え？ 公開練習？」

「総指揮官殿からお聞きしていませんか？」

私が聞き返すと、アデルは驚いた顔をした。彼女は総指揮官殿のお屋敷に長く勤めて
いるメイドさんだ。私達は年齢が近いので、仲良くしている。

何も聞いていないと私が首を横に振ると、彼女は丁寧に教えてくれた。

「騎士団は定期的に練習風景を公開しているのですよ。騎士団に入りたい人間の募集も
兼ねているのと、一般の方に仕事内容を理解していただくためです」

「それは誰でも見ることができなの？」

「できますよ」

「行きたい!!」

興奮して声を張り上げた私に、アデルは告げた。

「でも、ケイト様お一人で行かせる訳には……」

心配するアデルに、ここぞとばかりに誘いをかける。

「じゃあ、アデルも一緒に行こう」

「総指揮官殿がケイト様をお誘いしていないのに、それを差し置いて私がお連れして
は……」

「いいじゃない！ 総指揮官殿に聞かれたら、アデルは心配だからついて来たと言え
ばいいわ」

「そうまでして行きたいのですね」

アデルは苦笑する。だって見たいもの。こんなチャンスめつたにないでしょう？

「そうよ。でも気が散るからとか言って、私が行ったら嫌がるかもしれないじゃない。
なるべくバレずに見学しなくちゃね！」

強引にアデルの了解を取って、二人で出かけることになった。もちろん総指揮官殿に
は内緒で。バレたら、彼はびっくりするかしら。けど、ダメとも言われてないから別に
いいよね。

「じゃあ、来週ね！ おかみさんにお願してお休みをもらおうから」

そうアデルと約束をした私は、食堂のおかみさんに休みを申請して、一週間後を待ち
わびた。

それが今日だ。

アデルと二人、着いた先は、騎士団の練習所。

食堂からそう遠くない距離にあるけれど、ここに来たのは初めてだった。

すごく大きくて立派な古い建物で、こんな立派な門構えじゃ、入るのに躊躇しちゃうわ。年に数回しかない公開練習日のせいとか、結構人が並んでいた。思っていたより見学者は多い。日頃見られないから、このチャンス逃さない人も多いんだろ。な。人数が多い方が人混みにまぎられるので、総指揮官殿に見つからずに済むかもしれない。

まずは門の入り口の受付で、住まいと名前を記載する。そして番号の入った腕章を受け取り、腕につけた。これが見学者という印になるそうだ。

そして案内してくれる騎士の人の後を、団体でついて歩く。

「今日の公開練習は何をするのですか？」

「そうですね、まずは日頃の練習を見ていただきます。基礎の運動から始まり、剣の構えや受け方など、二人一組でペアを作って打ち合います。練習といえども真剣勝負です。妥協は許されません。途中、上司から一対一などの指導が入る場合もあります」
 まだ新米らしく、顔に幼さが残る案内役の騎士の人は、一生懸命私の質問に答えてくれた。

石造りの階段を上ると、一気に視界が開ける。下を見ると円形闘技場だった。

「この下の闘技場で日々の訓練を行っていますので、見学はご自由にどうぞ」

そう説明すると、案内役の騎士の人は去って行った。

「ケイト様、こちらにしましょう」

「ええ」

アデルが空いている場所を確保してくれたので、そこに腰を下ろす。

ちょうど、下で行われている練習風景がよく見える。すぐに私は闘技場で訓練をしている人達に目を向けた。

もちろん、お目当ての人はあの人、総指揮官殿だ。

いったいどんな表情……と言ってもいつもの無表情だと思うけど、どういう感じで練習しているのかしら。部下達との関係は？ 緊張と興奮が入り混じった目で、必死にその姿を探してしまう。

下では大勢の騎士が、集団になってそれぞれ練習をしている。剣の振りや、構えの練習。はたまた二人組になって、剣を打ち合っている人などもある。

これだけの練習をこなしているなら、あの無駄な肉のない総指揮官殿の引き締まった体つきも納得だわ。私もこの練習に混じれば、あつという間に痩せそうな気がする。

……命の保証もなさそうだけど。

一人納得してうなずく私に、アデルが耳元でこっそりささやいた。

「見つかりませんね」

「そうね、これだけの人数だもの」

ここにはいないのかな？ そう思った時、闘技場の騎士達がいつせいに練習を止め、列になって一カ所に集まった。

その迅速な行動を見て、何事かと思い、目を凝らした。

さっきまで練習で騒がしかった闘技場が、一瞬にして静まり返り、緊張感に包まれる。何が起こったの——？

固唾を呑んで見守っていると、騎士達の列の前を歩いている人物が目に入った。

あの背格好は……。遠目で見てもわかる。総指揮官殿の側近レスタード。

そしてその前を歩いている人物を見て、思わず声を上げそうになる。

薄い茶色の髪に切れ長の瞳。無表情のまま列の前を歩く総指揮官殿だった。

お目当ての人物を見つけ、嬉しさのあまり笑顔になる私。

「いた、いたよ、アデル」

私が隣のアデルにこっそり耳打ちをすると、アデルは小声で返した。

「いらつしゃいましたね。総指揮官殿が現れた瞬間、空気が変わりましたね」

そう、総指揮官殿は凄まじいほどの威圧感を放っていた。それは遠くにいる私でも感

じられるほどだ。

今の彼に、軽々しく話しかけることができる人はいるのだろうか。——いや、いないだろう。

これこそが、周囲の人間から『冷静沈着、時には鬼の総指揮官殿』と噂される彼なのだ。

総指揮官殿は列の中心あたりで立ち止まると、落ち着いた様子で口を開いている。おそらく、今日の練習内容などを指示しているのだろう。屋敷では見ることでできない彼の姿に、私はただただ驚いていた。

部下達に指示をする厳しいその姿に、和やかに練習風景を見守っていた見学者達の間にも緊張が走る。

きつと威圧感漂うこの姿が、部下の前では普通なのだ。これがいつもの総指揮官殿の姿なのだ。

私という時の彼の態度があまりにも違うので、私は思わずつぶやいた。

「やだ……」

「ケイト様……」

アデルが気遣う視線で、心配そうな声をかけてくる。

「総指揮官殿ってば……かっこいい」

頬に手を当て感激に震える私を見て、隣にいたアデルが前につんのめった。彼女はすくなく体勢を戻して言う。

「そつ……それはようございました」

その時、不意に人の気配を感じた。

「ケイト！ 同感だ！ 私もそう思う!!」

いきなり頭上から声が降ってきたので、驚いて顔を上げる。

そこにいたのは、大きな青の瞳を好奇心に輝かせ、微笑んでいる美麗な顔立ちの人物——エディアルド・ランバートン、総指揮官殿の兄上殿だった。

「兄上殿もいらしていたのですか」

「もちろんだよ、ケイト!!」

兄上殿は総指揮官殿が大好きで、いつも全身で構って欲しいとアピールしている。しかし、あまりにも愛情表現が激しすぎるので、総指揮官殿は迷惑そうだった。時には全力で拒否さえもしている。それでも懲りないのが兄上殿のすごいところだ。

兄上殿は本当に優しく、私から見れば、とても頼りになるお方だったりする。そんな兄上殿が、弟の日常を垣間見られる年に数回のこのチャンス逃すはずがない。

ふと兄上殿の格好が、いつもと違うことに気付いた。

「あの、それ……」

「ああ、これかい？」

兄上殿は深めに被っていた帽子を指で押し上げる。薄い青の瞳と、整った顔がより露わになった。

「私に気付いて、弟の気が散ってはいけないから念のため」

そう言って笑うけど、やはりどこことなく気品漂う兄上殿は目立つと思う。

私も兄上殿を見習い、変装の一つでもして、帽子でも被ってくれば良かったかしら。だけど兄上殿と違って私はそう目立つ方じゃないので、大丈夫よね、きつと。見学者達の集団にまぎれる自信はあるもの。そんな私の心配をよそに、兄上殿が興奮して声をかけてくる。

「それにほら、見てごらん。この腕章を」

兄上殿の指差す先の腕章には、「一」という数字が刻まれていた。自分の腕章を見ると『三〇八』。この番号は、いったい何を意味するのだろうか。

不思議な顔をした私に、兄上殿は得意げに教えてくれた。

「この番号は、この闘技場に見学に来た順の番号なのだ!」

「えっ!? 一番に入ったのですか!」
 「これも可愛い弟の姿を見るためさ!!」

いったい、どのぐらい早くから並んだのだろう。いつものことながら、そこまでの兄上殿の行動力はすごい。

兄上殿はふと思いついたように私に言った。

「しかしケイトが来るなんて、よく弟が許したね」

「それが、実は秘密なんです。総指揮官殿に話したら、気が散るからと反対されると思うので。これは私の勝手な行動です」

「そりゃあね、むさ苦しい騎士団の連中に、可愛いケイトを見せたくないからだと思うよ」

「それはいいですよ」

私は笑った。

「では、共に見よう! わが弟の華麗なる練習風景を」

そう言うと、兄上殿はもっと近くまで私達を案内してくれた。

さすが一番に入ったとだけあって、特等席だと言えるほど良く見える場所を陣取っていた。

「だが、ケイト、この場所は弟にバレる確率も上がる。だからこうやって壁際に寄って、

顔だけ出してのぞくのだ」

「こ、こうですか?」

「顔は半分だけ出すのがポイントだな!!」

私は兄上殿のアドバイス通り、顔半分だけ出してのぞいて見ていると、後方からアデルのため息が聞こえた。

「ケイト様、エディアルド様、それではかえって怪しい人物になっていますわ。逆に目立ちますので、普通に行っているのが一番かと思えます」

「む、それもそうだな」

兄上殿はアドバイスを受けて、すかさず立ち上がる。

改めて座り直し、総指揮官殿をじっくりと観察した。やはり無表情だし、漂う威圧感なまよは半端ない。お仕事中でも、気を抜けないのだろうな。

総指揮官殿は説明を終えたのか、片手に持った剣を頭上へ掲げると、騎士達も同時に掲げた。

「騎士の精神を貫き、これより練習を開始する」

低く落ち着いた声が響き渡り、続く騎士達の気合の入った声。

それを合図に騎士達は二人一組になり、向かい合う。そしてそれぞれが練習用の剣を

持ち、打ち合いを始めた。

総指揮官殿はレスターとこの後の予定の相談でもしているのか、何やら話し込んでいる。

私の目は総指揮官殿に釘付けになった。だってお仕事中の彼の姿なんて、めったに見られるものでもないし。仕事中の私はよく見られているのに、総指揮官殿だけ見せないっていうのはずるいじゃない。だからすっかり目に焼き付けておこうと思う。

しばらくすると、レスターは総指揮官殿の側から離れ、練習場の隅へ移動した。一方、総指揮官殿は、二人一組で練習している列の間を歩き始める。

たまに足を止め、黙って騎士達を見てはまた歩き出す。

見られている二人組は緊張しているのか、顔が強張ったまま打ち合いを続けている。

そして総指揮官殿が全員を一通り見た後、レスターが側に寄っていった。聞こえないけど、レスターに何か指示を出しているようだ。

しばらくするとレスターが集合をかけた。

先程よりも、騎士達の間を流れる空気が緊張を含んでいるのがわかる。

何だろ、これから何が起きるのかしら。

見ている見学席にも緊張が伝わり、周囲が静まり返っている。

そんな中、静かに口を開いたのはレスターだった。

「本日、総指揮官殿の直接指導を受けるのは、第三部隊のデイスと第四部隊のライト」

そう発表された瞬間、騎士達の緊張が和らいだ。周囲にも安堵の空気が広がる。

だけど、名を呼ばれた二名はかなり顔色が悪い。歩くのが精一杯みたいな足取りで、前に出ていく。

「弟の相手は彼らみたいだ」

兄上殿が隣でつぶやく。

そして総指揮官殿が重苦しい空気の中、上着を脱いだ。腕をまくり、練習用の剣を持つ。ゆっくりと構えの姿勢をとった総指揮官殿を見て、レスターが開始の声を発した。

「では、始め!!」

緊張感があふれる中、剣を振りかざし、最初に向かって行ったのは部下の一人だ。真正面から剣を振り下ろすが、総指揮官殿はいとも簡単に涼しい顔で受け止める。

そのままなぎ払ったと思ったら、今度は総指揮官殿の攻撃開始だ。

右から左から頭上からと、さまざまな角度から繰り出す剣に、部下は避けるだけで必死になっている。

一方、総指揮官殿の動きはまるで剣舞のように軽やかで、誰が見ても、その実力の差

は一目瞭然だつた。

やがて部下の一人の動きが鈍くなった。大量の汗を流して、息が荒くなっている。総指揮官殿が、そこを一気に突いて剣を払うと、部下が地面に沈む。倒れた部下に目もくれず、もう一人の部下が総指揮官殿に向かっていく。

この部下も必死に剣を繰り出すが、総指揮官殿にはかすりもしない。

総指揮官殿は二人目を相手にしているというのに、ちっとも疲れを感じていないような動きで剣を避け、攻撃を繰り返す。

しばらくすると一人目の部下と同じく、二人目の部下も地面に倒れた。

だけどそれだけじゃ終わらなかつた。

周囲の騎士が倒れた二人に水を飲ませると、二人は気丈にも立ち上がり、一斉に総指揮官殿に向かって行つたのだ。

一度に二人を相手にするなんて、いくらなんでもそれは分が悪いでしょう！ ヒヤヒヤしながら見守ることしかできない私は、握り締めた手にギュッと力をこめた。

しかし二人を相手にしていても、総指揮官殿は先程と変わらず涼しい表情で剣を避け、相手の隙を見て突いていく。見ている私までが、手に汗握るほどだ。

見学者達も盛り上がって歓声が上がっていた。

「行け！ 弟よー!!」

隣にいる兄上殿もそう。いつの間にか立ち上がり、声を振り絞って声援を送っている。しばらくすると部下の一人が地面に倒れ、それに続いてもう一人も地面に沈む。

総指揮官殿は、二、三言、部下に声をかけていた。剣が甘いところを指摘しているのだらう。

怪我をしなくて良かったとホツとしていた私に向かって、兄上殿が喜びの声を上げる。

「やった！ 勝った、ケイト!!」

「キヤア!!」

思わず大声で叫んでしまった。

だ、だって兄上殿が喜びのあまり興奮して、隣にいる私を抱きかかえてきたのだ。

広い胸に、細身に見えて逞しい腕。いつも側にいる総指揮官殿の香りとは違う、甘く、そして優しいなフローラル系の香りの中に混じる大人のムスクの香り。

「……ああ」

その瞬間、遠目で闘技場の中の人物の視線がこちらにゆつくりと向けられたのがわかつた。

一度瞬きをした総指揮官殿。その視線の先はもちろん私と、私に抱きつく兄上殿。

み、見つかっちゃったじゃないの!!
兄上殿のバカー!!

「ケイト！ ケイト！ 勝った、勝った！ ほら!!」

兄上殿は喜びのあまりはしゃいでいるので、その視線に気付いていない。しかし闘技場を向いて固まったままの私を見て不思議に思ったのか、ゆっくりと視線をそちらに移した。

「……あ」

兄上殿も気付いたらしい。凍てつくような視線が向けられていることに。

あ、兄上殿！ 今更慌てて帽子を深く被つても、まったくもって意味ないですから！
もう総指揮官殿にバレていますよ！

総指揮官殿はずっと私と兄上殿を見上げ続けている。視線を向けられているだけで、私達は二人で叱られている気分になってしまう。

「どうしようか、ケイト。バレてしまったよ」

「……はい」

「やはりこの帽子ではなくて、もっと他のデザインにすれば良かったか！」

兄上殿、そういう問題じゃないです。

私は、後で総指揮官殿になんて説明すればいいのか悩む。悪い事はしていない。……
だけど何となく気まずさを感じる。来るなどは言われてないけれど、来てもいいとも言われてない。

その後、総指揮官殿はまるで何事もなかったかのように私達に背を向けて、練習に戻った。

だけど気付いていないはずはない。だって、急に部下達への指導が厳しくなったのだから。

そう、それは部下達が自力で立ち上がることが困難になるぐらいの熱い指導だった。

お、お、怒ってらっしゃいますよね!?

そうして公開練習の終わる頃、見学席にいた私達に近づいてきたのはレスターだった。

「ケイト殿！」

「レスター」

「この後、お時間よろしいですか？ 総指揮官殿が皆さんをお呼びです」

キター!! お仕置き!? それとも説教タイム!?

今の私はかなり顔色が悪くなっているに違いない。

そして総指揮官殿のもとへ連行される私達。闘技場の階段を下りて、長い廊下を歩く

間の私の足取りは重い。

これから怒られるんだろうな……。いくら公開練習とはいえ、勝手に見に来たんだもん。だけど、私だって総指揮官殿のお仕事している姿を見たいじゃない。

どんな練習をしているの？ 部下達にどんな風に接しているの？ 好きな人の、自分に見せるのとは違う顔を見てみたいと思うのは、当然でしょう？

絨毯じゅうたんの上をしばらく歩くと、レスターがある扉の前で足を止めた。

「ここが総指揮官殿のお部屋です」

総指揮官殿はまず私に用事があるそうで、先に部屋に案内される。アデルと兄上殿は隣の控え室で待つように言われていた。叱られるなら皆一緒がいいのに……！

勇気を出してトントンとノックをすると、中から声が聞こえたので、重い扉を開けて部屋に入る。

「失礼します」

あ、総指揮官殿の香りがする部屋だ。足を踏み入れた瞬間、そんなことを思う。

総指揮官殿は部屋の窓際に置いてある机の上で両肘をつき、その美麗な顔を手にのせて、私を見つめている。

いつもと同じ無表情なので、その心の内までは読めない。

「い、ごめんなさい」

開口一番に謝るのはもちろん私だ。

「許可もなく勝手に見に来てしまって……」

「……」

「あと急に大きな声を出して気を散らせてしまって……お仕事の邪魔をしてごめんなさい」

私の謝罪を聞いても、総指揮官殿は表情を崩さない。

私は自分の気持ちを正直に告白することに決めた。ここまできたらそれしかない。

「でも、前からすごく興味があって、総指揮官殿がお仕事している姿をこの目で見たかったのです」

「……」

「とても迫力があって、あの……素敵でした」

いつもの総指揮官殿の姿に迫力と厳しさが加わった、周囲の人を圧倒するオーラ。

そんな姿を見ることができて、私は嬉しかったのだ。

総指揮官殿は至って冷静な態度のまま口を開いた。

「——怒っている訳ではない」

「え」

「ただ驚いている」

「お、怒ってないんですか……?」

「むしろ喜んでいる」

喜んでいると言われても、彼は相変わらずのポーカーフェイス。

彼は椅子から立ち上がると、私の前まで颯爽と歩いて来た。

喜んでいるという総指揮官殿の言葉に、嬉しい気持ちと共に恥ずかしくなる。

くすぐったくて、だけど照れちゃう、そんな感情。

自然と笑顔になって見つめていると、彼はおもむろに口を開いた。

「——騎士団にそこまで興味があったとは」

……え? 今、総指揮官殿はなんて言った?

私は総指揮官殿個人に興味はあっても、騎士団にはまったくもって興味などない。そ

う断言できる。できるけど——

「これを機に、騎士団について知識を深めるのも良いと思う」

「でっ、ですよね!」

ぼつりとつぶやいた総指揮官殿に思わず、変な相づちを打ってしまった。私のバカー!

でも、静かにうなづく彼を見てると何も言えなくなる。

だって、彼は本当に騎士団の仕事に誇りを持っているのだ。なのに、『総指揮官殿の姿に見惚れていました』なんて、そんな不埒な意見を何故言えようか。言えない。恥ずかしすぎる。

己の浅はかな考えを一人反省していると、総指揮官殿は私に何かを差し出してきた。

「——これを」

「な、なんですか? これは……?」

彼の手にある分厚い本を見て、嫌な予感が湧き上がる。

「これは騎士団の全てが詰まっている書物だ。これには国における騎士団の役割や、過去の功績などが書かれている」

なにこれ、デジャヴ。

以前、お互いお薦めの本を紹介し合ったことがあった。あの時も確か騎士団関係の本を三冊ほど渡され、ぜひ読んで欲しいという彼の熱意に負けたのだった。結果、辞書を片手に夜通し頑張ったよ、私は!! 今回もか……

「が、頑張ります」

総指揮官殿は私の返事を聞き、満足げにうなずいた。そこから書棚に向かい、そこに

かけられているカーテンを力いっぱい引いた。

引いたら先から現れたのはズラツと並ぶ本、本、本……

「これらは、騎士団がどのようにして今に至るかが書かれている本ばかりだ」

「そ、そうですか」

総指揮官殿の声に気が遠くなる。つまり、これを読めということですね、総指揮官殿。

「騎士団は剣技の他に、筆記試験も行っている」

そ、それが一般人である私に、何の関係があるのでしょうか。

「知識試しとして、受けてみるといい」

興味な——い!! けど、そんなこと言えな——い!!

私は、珍しく饒舌な総指揮官殿の瞳を見つめた。ここは勇気を出して断らなければ。

せーのっ——

「が、頑張ります……」

きゃあああ——!! どの口が言ったああああ!!

総指揮官殿の期待を裏切りたくないと思った気持ちをつい言葉にしまった私のバカー——!

もう引き返せない。

総指揮官殿から応援されているような熱い眼差しを受け、逸らしたくなる。

こうなったら兄上殿も引きずりこんで、一緒に頑張ってもらおう。

「で、では兄上殿と一緒に頑張ります」

「兄には別件を考えている。必要なら自分が教えよう」

その台詞に、ちよつとドキツとしてしまった。私ってば、なんて調子がいいのだろう。

そして総指揮官殿は、扉の前で待っていた兄上殿を部屋に招き入れた。

「やあ! 弟よ! ケイトと愛の密談は終わったかい? そしてやつと私を仲間に入れてくれるのか! 待ちわびたぞ! 扉にくつついて、聞き耳を立てようかと悩んでいたよ!!」

笑いながら入室してきた兄上殿のテンションは、相変わらず高い。今の私の暗さとは対照的だ。

そんな兄上殿に、総指揮官殿は冷ややかな視線を投げた。

「久々に稽古の相手をしよう」

「——え」

その言葉に体を固まらせる兄上殿に向かって、総指揮官殿は続けた。

「体も鈍っているだろう。——それだけでなく、心も」

総指揮官殿に言われ、事態を察した兄上殿の声が凍り付く。

「いや、私は剣を持つ実践派ではなくて、どちらかといえば頭脳派だから遠慮したいかなーって」

どことなく逃げ腰になる兄上殿。その背後に、総指揮官殿が俊敏しんびんに回った。

そして兄上殿の襟首を掴んだかと思えば、有無を言わず部屋の外へと連行する。

「ま、待ってくれ！ 弟に強引に引っ張られるという凶は、すごく喜ばしいことだが、ちょっと遠慮したい!!」

「……」

「私の足腰が立たなくなるっ！」

「……」

「やめてくれえええー!!」

廊下からまるで断末魔のような悲鳴が聞こえ、やがて消えた。

これから地獄の稽古を受けるのだろう、多分……

見に行こうかと思っただけで、さっきの練習風景からも想像がつく。総指揮官殿はきつと容赦ようしやないだろう。兄上殿のプライドもあるだろうし、うん、そっとしておこう。

それに人のことを気にしている場合じゃない。

私は書棚一杯に詰め込まれた本を見て、深いため息をつき、がっくり肩を落とした。筆記試験か……勉強なんて大嫌いだー！

この試験が、これから私の何かに役立つのかなあ……。どこか遠い目をしながら、屋敷に帰るとすぐさま机に向かった私だった。

2 総指揮官殿の決意

数日前より、自分は任務で地方へ出張している。

滞在期間は二週間ほどの予定だ。

この地方は朝晩の寒暖の差が激しい。日が沈む頃には、吐息までが白くなるので、厚手の上着が必要だ。体調を崩さぬように注意しなければ。

日が落ちると同時に早めの夕食をとる。寒い地方ならではの貯蔵方法で格段と美味になった酒を味わい、温かい料理に舌鼓しんこを打った後、自室に戻った。テーブルに、食堂から持ち帰ったブランデーのボトルとグラスを置く。

この地方の夜は長く、やけに一日が長く感じられる。考え事をする時間がたくさんあ

るということで、自分は精神統一のため、椅子に腰かけたまま目を閉じた。彼女は今頃、何をしているのだろうか。

目を閉じれば、浮かんでくるのは彼女のことばかり。精神統一などでできそうにない。少し、酔ったか――

いつもより度数の高い酒を飲んでいるせいだろうか。味は格別だが、一人で飲む酒はなんだか味気なかった。やはりいつもの彼女の声が開こえないと物足りない。

それに一人だと、自然と酒を飲むペースが早くなる。自重しなければ明日に響いてしまう。そう思いながら、最後の一杯にしようと心に決め、グラスにブランドーを注いだ。バルコニーへと足を向け、そこから外を眺める。力強い木々が立ち並ぶ雄大な景色を見ると、己おのれの存在の小ささを実感する。

自分の吐く息だけが感じられる自然の中、目を閉じて五感を研ぎ澄まし、しばし立ち尽くす。

ふと人の気配を感じてバルコニーから部屋に戻ると、足音が聞こえてきた。

その足音の主は扉の前で止まり、入室の許可を得るため、ノックをした。このノックの仕方は、レスターに違いない。

部屋に入ってきたレスターは寒いからか、頬と鼻の頭を赤くさせていた。

「総指揮官殿へお届け物です」

レスターが自分に書類の束たばを手渡す。その中に気になる物を見つけた。

「……………」

茶色の封筒と分厚い書類に混じる、一通の封筒。その薄い桃色の封筒に包まれた手紙の宛先は自分となっている。

自分は思わずそれを凝視ぎやうししてしまった。

レスターはそんな自分の様子に気付かないまま胸元から手帳を取り出し、明日の日程を一通り説明すると部屋を去った。

一人になると、真っ先に手にしたのは薄い桃色の封筒。

机の引き出しから小形ナイフを取り出し、中を傷つけないよう慎重に封を開ける。中には封筒と同じ薄い桃色の便箋びんせんが、二つ折りにされて入っていた。

『拝啓 総指揮官殿』

そこから始まる文章を目で追う。

『お元気ですか？ 総指揮官殿がここを離れて、数日が経ちました。そちらは寒さが厳しい場所だと聞いています』

丁寧に書かれた文字を見て、自然と顔がほころぶ。

『こつちも最近は何の日や曇りの日が多く、朝晩は風が肌に冷たく感じます。だけど、こう寒く感じるのは、天気の良いだけではないと思います。いつも隣にいる総指揮官殿がいないから——』

最後の文章を読んだ瞬間、心臓が大きな音を立てた。

自分もまさに、壮大な自然の景色を前にして何かが足りないと感じていたのだ。どんなに綺麗な景色も、一人で見るより二人で見た方が感動も倍になるはず。

彼女も同じ気持ちだったのだと思うと、離れていても繋がっているような気がしてくる。

綺麗な彼女の文字を指でそつとなぞりながら、先を読み進める。

『何か物が足りなく、寂しく感じてしまう毎日です。いつ頃お戻りになりますか？あと何日寝たら、あなたに会えるのでしょうか？』

こんなに正直に気持ちをぶつけられるのは初めてなので、照れてしまいが、それ以上に嬉しさがこみ上げる。

これはやはり、口づけを交わしたあの日を境に、今までの関係から一歩前進したと捉えていいのだろうか。

優しくするつもりが、彼女が愛しいあまり、その柔らかな唇に触れた瞬間、籠が外れ

た。思わず彼女の口中に押し入ると、彼女もそれに応えようとしてくれたので余計にだ。

呼吸を荒くした彼女がその場へたりこんだ瞬間、我に返った。

そんな自分がいなくて寂しいと言ってくれた彼女のもとに、早く帰りたいと思う。声だけでも聞きたい。

だけど、今はそれすら叶わないので、まずは自分の安否を伝えたいと思う。

『総指揮官殿のお帰りを、首を長くして待っています』

急いで返事を書かなくては——

はやる気持ちを抑え、手紙の最後まで目を通す。

『お返事待ってます——あなたの兄エディアルドより』

「……」

便箋の最後に書かれたその名を見た瞬間、床に手紙を叩きつけた。

* * *

数日前から総指揮官殿はお仕事で地方にいるので、ひとりで食堂へと向かう。

総指揮官殿としてはその間は送迎ができないため、仕事を休んで欲しそうな雰囲気を出していたけど……そんなに何週間も休めますか！ まったくもってどこまで心配性なのか、総指揮官殿は。いつまでたっても私を子ども扱ひする彼を、苦笑しながら見送った。そうして一人歩く道のり。見慣れた景色の道の真ん中に、いつもと違うものを見つけ、立ち止まる。

「……………」

落ちているのだ、人が――

正確には倒れていると言うのかもしれない。その人物は仰向けあおむになって目を閉じていた。

恐る恐る近づいて様子を見ると、胸が上下している。良かった。息はしているので、どうやら生きてるようだ。

「あの……………」

こんなところで寝ていると危ないですよ、と声をかけてみる。

「腹…………減った」

小さな声でつぶやくのは、若く、身なりのいい少年だ。そのまま放置はしておけず、自分のカバンの中をあさった。

確か、おやつとして持って来ていた焼き菓子があったはず。

「これ……………」

おすおすと私が差し出すと、少年は急に起き上がり、そのままがつついて一気に食べた。あまりの食べっぷりに私は驚いたけど、そのまま放つてはおけず食堂に連れて行き、お腹いっぱいになるまでご飯を食べさせた。

それから数日後――

「このケーキ美味おいしそう！ それにとってもいい香り」

「どうぞ、召し上がれ」

食堂に来てくれたのはアルピラ。私の小さなお友達で、まだ八歳の少女だ。

総指揮官殿のことが大好きな彼女は、最初私にライバル宣言したのだけど、いまではすっかり仲良しになった。可愛い服に身を包み、身だしなみにも気を遣う、女子力抜群の貴族のお嬢様だ。お供の人を引き連れて、よく食堂に遊びに来てくれる。

そのアルピラに、おかみさん特製のシフォンケーキといつも飲んでいるヤデーミルクを出していると、来客を告げるベルが鳴り響いた。

「ケイト、来たぞ！」

「あら」

元気に食堂に顔を出したのは、先日道で倒れていた少年、マルセルだった。

あれから、彼は頻繁ひんぱんに食堂に通ってくるようになった。

マルセルは十五歳。身長は、私とそう変わらないけど……少しだけマルセルの方が高いかな？

さらさら茶色の髪に緑の瞳を持つ、見目麗みめうつくしい少年だ。青年と言っているのかもしれないけど、少年って感じの方が強い。まだ子供らしさがどこもなく残る顔立ちだからだろう。

若いだけあって、物おじせずと思うがまま行動する。いや、これは性格もあるかもしれないけどね。

「外出するにも、いつも誰かしら付いてくるからよー。今日はまいてやったぜ!!」

普通の家庭では、マルセルぐらい大きな息子にお供なんてつかない。身なりもいいし、本人は明かしてないけど、きっと良家の息子だと思う。

何でも最近、家の教育の厳しさが嫌になったらしい。それまで大人しくしていたのがバカらしくなり、外に出たいと思うようになったという。

それである日も屋敷を抜け出したものの、まんまとバレて追跡されていたらしい。

それを上手くまくため、慣れない街並みを走り回り、ついには道端で力尽きたということだった。

「そんなことしてまた倒れたら、まぬけだわ」

「うるさい、おチビ」

アルビラはマルセルにおでこを軽く指ではじかれ、のけぞる。

それからすぐにマルセルは私に向き直った。

「ところで、ケイト。いつ暇になるんだ？」

「私？」

マルセルは期待を込めた目で私を見つめている。

「えっと……次の休みは三日後あしけだけど、部屋の掃除もしたいし、読みたい本もあって——」

「そんなこと後回しにして、俺と——ぐあああっ!？」

マルセルは、アルビラから足蹴あしげりという反撃を食らった。脛すねに当たったようで、その場にしゃがみ込み悶もたえている。

「何するんだ、おチビ！」

「レデイに向かって失礼しちゃうわね」

アルビラは少々赤くなったおでこをさすりながら、鼻息荒く文句を言う。

「誰がレディだ。いつも会うたび、ヤデーミルクを飲んでるお子様じゃないか」

「これは将来のためだもん！」

「本当のレディなら、こんな足蹴りなんてしないんだ！」

マルセルとアルビラは、いつの間にかケンカ友達みたいになっていた。おかげで最近店は賑やかだ。

「マルセルはおバカさんだわ。勝手に屋敷を抜け出してお金を落とした挙句、迷子になるなんて。ケイトに拾われなきゃ、のたれ死ぬところだったじゃない」

「うるさい、おチビに男のロマンがわかってたまるか！ 男には自由になりたい時があるんだ」

「ケイトもケイトで放っておけば良かったのに！」

「ケイトはすごく優しいんだ。おチビとは違うんだー！」

この二人はいつもこんな感じ。言いたいことを言い合って、毎回ぶつかっている。だ
けど何故か微笑ましく見えるのは、気のせいではないわよね。

「そんなことよりケイト。お礼をしたいから、俺の屋敷に遊びに来ないか？」

マルセルが言うお礼とは、道端に倒れていた時、お菓子をあげたことなのだろう。

「お礼なんていいから気にしないで」

「いや、だってよー」

本当に大したことはしていないので、気にすることはないと思う。

だけど、歳の割に律儀なマルセルはどこか納得していない様子だったので、一つ提案
をしてみた。

「そうね。そんなに気にするなら、この食堂でご飯を食べて売り上げに貢献してちょう
だい」

それでマルセルの気が済むのなら、十分じゃないかしら。我ながらいい案だと思い、
笑顔で口にする。

「おっ、おう！」

すぐに顔を真っ赤にして、照れて張り切るマルセルは可愛い。

「じゃあ、この店のメニューを全部、端から端まで持って来てくれ！」

「マルセル頼みすぎ!!」

するどく突っ込むアルビラの声が響いた。

それからアルビラはお昼寝の時間だからと、お供の人に連れられて帰っていった。
夕方頃になり、私の勤務が終わる。

屋敷に帰ろうと食堂の外に出たところで、声がかかる。

すでに店を出ていたマルセルが、入り口の側に立っていた。

「ケイト！」

「マルセル？ どうしたの？ 何か忘れ物？」

「いや、忘れ物というか……」

夕焼けを浴びているせいかマルセルの顔はほのかに赤い。私の視線を受け止めたマルセルは、しどろもどろになった。しばらく下を向いていたが、意を決したように顔を上げた。

「この間のこと、ちゃんとお礼がしたくて……でも店にはいつもおチビとかいるし、二人になれる時ってないだろ？ だから今日は送るよ！ ケイトの家まで」

「大丈夫よ、外はまだ明るいし」

「違う！ 俺が知りたいんだ。ケイトの住んでるところとか——」

そこまで言ってマルセルは、口を手で押さえてハッとした様子だった。

夕日を浴びて赤かった顔がますます赤くなる。つい完熟トマトを連想してしまった。

「べ、別に、追いかけて回そうとか、そんなんじゃないけど!!」

慌てて弁解をするマルセルに、思わず笑ってしまふ。

「じゃあ、せっかくだから送ってもらおうわ」

そんなに遠くもないし、マルセルが帰る頃でもまだ日は暮れていないだろう。私はそう判断した。

帰り道、私達は、好きな食べ物や取り留めもない話で盛り上がった。

しばらくして、目的地にたどり着く。

「ここは……」

総指揮官殿の屋敷を見て、マルセルが声を失った。

「あ、ごめんね。驚かせちゃったかな。先に言っておけば良かったね」

どうみたって私みたいな庶民が豪華なお屋敷に帰ったら、不思議に思うはずだわ。

「実は事情があって、このお屋敷のお世話になっているのよ」

「この屋敷は——」

「私がお世話になっている人のよ。アリオス・ランバートンさん。騎士団を束ねる総指揮官殿よ」

その瞬間、マルセルが額に手を当ててよろめいた。

「嘘だろ……」

「……？ 本当よ？」

何が嘘だと言うのだろうか。マルセルはそのままその場に頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「——落ち着け俺、落ち着け……」

そんな言葉を念仏のように繰り返すマルセルを見て、私は首をかしげてしまった。しばらくすると、マルセルは顔を急に上げる。

「ケイト、こんなこと聞くのもあれだけど、毎日辛くないか？」

辛い？ マルセルは何を辛いと言うのだろう。

総指揮官殿が良くしてくれるから、ここでの生活に不自由は感じていない。

むしろ優しすぎる対応で、たまに過保護だと感じてしまうほどだ。私のことをすごく病弱とか幼い子供かと、勘違いしていませんか？ と聞きたくなるぐらい、大事にしてくれる。まるでどこかのお姫様にでもなったみたいな待遇に、最初は照れたけれど、今は慣れていた。こんなことを思う私は贅沢者なのだろう。

「大丈夫だから、俺には本当のことを言っただけ!!」

「そうね……」

真剣な顔で熱い眼差しを向けてくるマルセルに、ついつい考え込んでしまう。

ここ最近では総指揮官殿が地方に行ってしまったって、寂しい。

一緒にいても特に話す人ではないけれど、同じ部屋にいるのといかないのでは違う。朝晩の食事も一人でとるのは味気なくて、なんだかいつもより食が進まない。

だけど、お屋敷の皆に心配をかける訳にもいかないので、元気に振る舞っていた。

お手紙でも書くかと思っただけど、なおさら会いたくなるといけないから我慢している。

それに早く帰って来て欲しいなんて、そんなことを伝えたら、総指揮官殿もその重さにうんざりするだろうから。

困らせちゃいけない——胸に閉じ込めていた想いと総指揮官殿の顔を急に思い出して、シユンとしてしまう。

マルセルは私の曇った顔を見て叫んだ。

「やっぱりな。なんて健気けんげなんだ、ちくしょー！ 可愛いぞ！ ケイトめ！ 年上なのにしっかりしているようで、どこか抜けているところが特に……そうだよな、あの鬼とか冷血漢とか言われている人物と一緒に暮らしているんだ。毎日が針のむしろで苦しいと思うんだ。たまに顔を合わせる時があるけど、俺だって怖い……いや、苦手だしな。そんな相手から、誰かがケイトを助け出してやらないとな。その役目はもちろん俺だろ！ ……そうだよな！ ケイトもそう思うよな!!」

マルセルの言葉は早口だったので、よく聞き取れなかったけど、きっと私の寂しいという気持ちに同意してくれたのだろう。

年下なのに、なんて優しくしてすっかりした子なの！ こんな顔して心配かけてはいけないと、私はすぐに笑顔を作る。それに、もうすぐ彼も帰ってくるはずだし、悩みもやがて解決するだろう。

「でも、大丈夫よ。お屋敷の皆も優しいし」

留守を頼むと言って出かけた総指揮官殿の手前、寂しいなんて言えない。総指揮官殿と約束したもの。留守は任せてくださいって。さあ、ここは気合を入れなくては！

幸いお屋敷には、メイド兼友達のアデルも、子猫のマールもいる。食堂に行けば、おかみさんとおじさん、それにアルピラもよく遊びに来てくれる。

それに兄上殿だって心配して顔を見に来てくれるし、最近じゃ、マルセルという新しいお友達もできたしね。

「ありがとう、マルセル」

お礼を言うと、マルセルは照れた様子で鼻をかいた。

「良ければ、お屋敷に寄って紅茶でも飲んでいかない？」

アデルの淹れてくれる紅茶は美味しい。それに一杯ぐらいなら、まだ日も落ちないだろう。

「おっと、ケイトの気持ちはありがたいけど、俺はここまでだ。ここから先は俺が足を

踏み入れたら、それこそ張られている結界にでも、命を持っていかれそうな気がする。

なんと言っても、あいつの住み家だからな」

マルセルはそう言って頑なに断った。そんな、遠慮なんてしなくてもいいのに。

「ケイト！ 俺が絶対どうにかするから！」

熱い眼差しと共に、マルセルは私の手を強く握った。手に触れた瞬間、不覚にもドキッとした。

いつもそうやって優しく触れる人を思い出したのだ。

あー、総指揮官殿早く帰ってこないかなあ……

そんなことを考えながら、帰路につくマルセルを見送った。

* * *

今日の業務が終了し、自室に戻る。

机の上には、レスターから届けられた手紙と書類が山になっていた。手紙の束をまとめてある紐を解く。

全て仕事関係の手紙だと確認すると、またそれらを机の上に戻した。

余計な手紙は毎日届くが、一番欲しい手紙は来ない。

人知れずため息をついた。

やはり夜に近づくにつれ、寒さが一段と厳しく感じる。

少しでも火の足しになればと思ひ、書き損じた書類と、先日届けられた忌々しい手紙を暖炉へと投げ入れた。

炎は一瞬激しく燃え上がったが、まだ部屋は暖まらない。冷えている部屋で一人、椅子に腰掛ける。

今日も、彼女からの手紙は届いていなかった。前回のようにならぬ手紙が欲しいと願うなど、なんと自分は彼女に甘えているのだらう。前回の地方公務先に届けられた彼女からの手紙。それを讀むと、日々の疲れなど感じなくなつた。

遠くにおいても彼女と繋がっていられるような気がしたのだ。

この気持ちは到底口にはできない。自分は自嘲気味に笑つた。

今は消灯前のわずかな自由時間。部下達は今日の仕事の疲れを酒で癒していることだらう。

自分もこんな夜はブランデーでも飲み、体を温めようと思ひ席を立つ。

戸棚にしまわれたブランデーを手に取り、瓶を振ると、上質なブランデーが半分以上も入っている。

そういえば、この部屋にグラスがないことに気付いた。先日部屋で飲んだ時は、食堂から持つてきたのだつた。レスターは何かあれば呼び鈴を鳴らすように言つていたが、これぐらいなら自分で食堂まで取りに行こうと思ふ。たまにはレスターをゆつくり休ませてやるう。

階下に降り、暗闇の中、廊下に灯されているわずかな明かりを頼りに歩く。

しばらく進むと、一室の扉が少し開いていて、そこから光が漏れているのが見えた。

その部屋には部下が数人集まり、雑談に花を咲かせていた。

「それで、別れ際に口づけしようと思ふなら、思ひっきり頬を叩かれた」

「はははっ」

「笑いごとじゃねえって！　それで、いきなり怒り出してよ！」

「お前、いきなりはダメだ！　ちゃんと順番があるだろ、順番が。言うこと言つたのか？」

部下達はどうやら、女性について話をしていらした。部下達はまた若く、今が

一番異性に興味がある年齢だ。

ふと、柔らかなような艶のある唇に引き寄せられ、その魅力に抗えず、彼女の唇に触れたあの夜を思い出す。

最初は彼女の額に口づけを落とすだけのつもりだったが、それだけでは満足できな

かったのだ。

もっと触れたいと求めてしまった自分は、自制心が弱い。

結果、彼女に無理をさせ、倒れ込むぐらいの口づけをしてしまった。

目を閉じればあの時の情景がありありと思い浮かぶ。しかしここで浸^{ひた}っている場合ではない——そう我に返り、頭を強く振る。

水を差してはいけないと、廊下をそのまま進もうかと思ったが、扉が開いている。通り過ぎれば、部下達は自分の存在に気付いてしまうかもしれない。どうしたものかと思案し、壁に背を預ける。

聞こえてくる話題は、やはり酒に女。聞き耳を立てるつもりはないが、自然と耳に入ってくるのだ。

「やっぱり惚れた女には、ちゃんと言わないと駄目だろ」

「けど、言わなくてもわかると思っていたんだ。毎日会っていたし」

「ばっか！ 順番を間違えると後悔するのはお前だぞ。現に連絡も取れないんだろ？」

「……なんでわかる？」

「そりゃ、わかるさ。大事な女性には言葉で伝える方が先だ！ 俺がニーナを落とすのに、どれだけ苦労したと思ってるんだ」

「恋多き男だったレイモンも、今や彼女一筋だもんなあ。人って変われば変わるもんだな」
 「おう！ 俺はこれからもニーナだけだ。まあ、お前達みたいな迷える子羊にアドバイスぐらいはしてやってもいいぜ！ このレイモン様に何でも聞けよ！ 恋の教祖と呼んでくれ！」

どっと湧き上がる笑い。部屋の中は大いに盛り上がっているようだ。

どうやら、レイモンが一番恋の手ほどきに詳しいらしい。

レイモンにそんな特技があったとは初耳だ。自分の部下といえども、把握しきれない事は多々あると感じた。

部下達も、家族や恋人と離れて過ごすのは辛かろう。せめて自由な時間だけでも、友と過ごす時間を大切にするといい。

そう思い、自分はグラスをあきらめ、今来た廊下を静かに引き返すことにした。

翌日。夕食をとり終え、これから自由時間という時に、部屋の扉が控えめにノックされた。顔を上げ、持っていたペンを机に置く。お目当てる人物がようやく現れたらしい。「総指揮官殿、お連れしました」

レストアが先に入室し、礼を取る。その後ろから、一人の騎士が緊張した面持ちで入

室してきた。

「レ、レイモンです！ このたびは若輩者の自分をお呼びと聞いて、かつ、駆けつけました……！ なっ、なんなりと仰せ付け下さい！」

自分はレスターに目配せをして、彼を退室させた。

レイモンは、レスターの後ろ姿を不安そうに見送っている。

さて、これで一対一だ。

自分は椅子に腰かけたまま腕を組み、レイモンを改めて観察した。

背が高く、色黒の肌を持ち、髪を短髪に刈り上げている青年。緊張からか、こげ茶色の瞳は瞬きを繰り返している。

年齢は自分とそう変わらないようだ。

レイモンはかなり戸惑っている様子だった。無理もない。いきなり上司である自分の部屋に呼ばれ、二人つきり。これで不安にならない訳がないだろう。しかし叱責を浴びせるつもりではない。早く解放してやるため、さっそく本題に入ろうと口を開いた。

「質問がある」

「はっ」

「手紙が来ない理由には、何が考えられる？」

一瞬にして部屋に沈黙が訪れる。

しばらく経ってからレイモンが口を開いた。

「はっ、はい？ 手紙？ 手紙とはいったい……」

「——字が書かれた紙だ」

「……………」

レイモンはじっくりと最善の助言を考えているのか、口を開けたまま止まっている。やがて、意を決したように言葉を発した。

「あ、相手から来ないなら、ご、ご自分から出せばいいかと思いますが……」

レイモンの震える言葉を、自分の頭の中に書き込む。その作業を終えると、息を一つ吐いた。

「そうか、わかった。……下がってくれ」

「えっ？ ……はっ、はいっ！ 失礼しました！」

レイモンは動揺した様子で挨拶をして、部屋から退室した。

一人になると、部下であるレイモンにどれほどみつももない事を相談しているのだろうかと自嘲気味に笑う。

しかし、思い切ってレイモンに聞いて良かった。これで自分から手紙を出す踏ん切り

がついた。

さすが恋の教祖と呼ばれ、同僚らに相談に乗ると豪語しているだけあって、色恋事に長けていた。相談すべき人物に間違いはなかったのだ。レイモンの前では、上司である自分も迷える子羊の一人にすぎない。

レイモンに背中を押されたこともあり、みずから行動することを決意する。

彼女は自分の手紙を受け取ってくれるだろうか。それに、伝えねばならぬことがある。

そのことに気付いた今、気持ち焦るばかりだ。

夜も更け、寒さがだんだん厳しく感じられる部屋で、一枚上着を羽織る。そして、引き出しから白い便箋と封筒を取り出し、ペンを走らせた。こちらの近況を伝えることから始めようと思う。

つい長くなりがちなので、伝えたい事だけを短く簡潔に書こうと心がけた。

* * *

「ケイトー！」

今日も元気な足音と共に食堂の扉が勢いよく開き、来客を告げるベルが鳴り響く。

「また来た」

椅子に座っていたアルビラは、振り返ってマルセルの姿を確認すると呆れたような声を出した。

「だけど、まんざらでもないだろう。心なしか声が嬉しそうだ。それに、アルビラだっ
てここ最近、食堂に遊びに来る回数が増えた。これって、気のせいじゃないよね？」

「なあなあケイトー！ 今日も一緒に帰ろうぜ！ 送って行く」

食堂に入って来るマルセルは全開の笑顔だ。

まるで太陽の光を受けたような新緑色の瞳が輝いている。そんな笑顔を向けられると、こっちまで元気を分けてもらっている気になって、つられて笑顔になる。

そうやって私が和んでいた時、静かに食堂の扉が開いてベルが鳴り響いた。

「ケイトー！」

そこに現れたのは、両手を広げて近づいてくる兄上殿だった。

「お久しぶりです」

「ケイトは元気だったかい？」

「ええ。おかげ様で元気です。兄上殿は？」

「私？ 私はそうだな……決定的に弟が足りない!! それ以外は至って普通の毎日だ」

「相変わらずですね」

「弟がいなくて暇だから、ちゃんと仕事をしていたよ」
 兄上殿は総指揮官殿がお留守の方が、仕事がはかどるらしい。それって、どこかおかしくないか？

まあそれはともかく、総指揮官殿のお帰りをすぐく心待ちにしているのだろう。もちろん、私もだけど。

「それでケイトは弟不在の間、ここまでどうやって来ているんだい？」

「朝は一人ですけど、最近はその間にいるマルセルが……」

振り返りマルセルを紹介しようとしたけれど、さっきまでいたはずの彼の姿が消えていた。

唾然とする私に、アルビラはケーキのクリームがついた口をもぐもぐ動かしながら説明してくれた。

「マルセル、急用とか言って裏口から走って行ったよ」

ええ？ マルセル、いつの間にか帰っちゃったの？ まったく気付かなかったわ！
 すると、兄上殿は私に近づき、顔をのぞき込んできた。

「弟以外に騎士を見つけないなんて、私としても妬けてしまうな」

「いえ、そんなんじゃないですよ。弟がいたらこんな感じかな、と思ってます」

兄上殿に冗談交じりの美麗な微笑みを向けられ、手を振って弁解をする。

「……マルセル、かわいそ」

アルビラがヤデーミルクを飲みながら、ぼそっと意味不明なことをつぶやいた。結局マルセルは、その日は姿を現さなかった。

そんなことがあった日の夜、手紙が届いた。遙か遠い地方で頑張っている総指揮官殿からだった。

嬉しくて、けど少し緊張しつつ封を開ける。

白い便箋に丁寧な文字が並び、一つとして乱れない。総指揮官殿の手柄を表しているような文字だ。ただ難解な文章で書かれているので、文章力のない私は辞書を片手に頑張らないと解読できない。

その枚数はなんと五枚。

すごい。毎度のことながら、総指揮官殿は筆めだと感心してしまう。

手紙に書く半分もしやべらない人なのに、手紙となると饒舌だ。

そのギャップに思わず頬が緩む。もしかしたら私達、筆談で会話した方が話が弾むんじゃないかな？